

2022年4月3日 礼拝説教要旨

詩編講解説教104「神の息吹」

詩編104：28～30、ヨハネ20：19～23

詩編第104編の最後35節に「ハレルヤ」がありますが、これは、ハレル（賛美する）ヤハ（主）で主を賛美するという意味の言葉です。実は以外にも詩編で初めてここに登場してくる言葉です。「ハレル」は賛美するということですが、改めて詩編が讚美歌であることを思います。わたしたちはコロナ禍でなかなか讚美歌を歌えないでおります。早く心置き無く賛美を歌えるような状況になってほしいと願いますが、その分、詩編という賛美の御言葉を味わってまいりましょう。

第104編は全体的に神さまの創造の御業を讃える内容となっております。天地が造られ、その中に植物や生き物が造られていく。また季節が定められ、昼と夜が配置される。自然、命の創造がこの詩編のテーマでもあります。ですからこの104編には創世記にあります天地創造の物語に通じるところがいくつも見られます。今日読みましたところ30節「あなたは御自分の息を送って彼らを創造し、地の面を新たにされる」とあります。ここにある「創造する」（バーラー）という言葉は創世記の1章1節「はじめに神は天地を創造された」ここに使われている言葉です。

この「創造する」という言葉の主語は神さまにしか用いられません。神さまだけがこの自然、命を創造することができる。この自然、命が存在する根拠は神さまにあるということです。さらに言えば、そこには創造された神さまのご意志が働いています。意味もなく、自然発生的に存在しているわけではありません。神さまが意図して、そこに存在させているのです。創造の信仰は何より造られたすべての被造物に存在の意味と目的を与えます。わたしたちに生きる意味、尊厳を与えます。どのような命も神さまに創造された以上は、誰もこれを奪う権利はありませんし、すべて尊重されるべきものです。

ところがわたしたちが生きている世界では必ずしも命がそのように扱われてはおりません。ロシアの始めた戦争はウクライナに甚大な被害を及ぼしております。すでに多くの人命が奪われ、自然が破壊されています。それが戦争ですが、改めて戦争は神さまの創造の御業への冒瀆であることを思います。神さまが創造された命、自然を人間が身勝手に奪い取る。破壊する。これは人間の傲慢の極みです。戦争は人類が生み出す悪の最たるものだと言えます。これ以上の人権侵害、環境破壊があるでしょうか。またそこに芽生える憎悪というのは計り知れません。この憎しみは何世代にも及ぶことでしょうか。殺戮が繰り返されるでしょうか。そのようにただ命を奪うだけではない。心を奪う。これは本当に悲惨です。

この詩編を詠んだ詩人もまたそのような人間の悲惨を知っています。この詩編も先ほど申しましたように、創世記の天地創造物語を踏まえていると思われますので、捕囚帰還後の時代に成立したと考えられております。捕囚が解かれ、帰ってきたイスラエルが目にした光景は焼き尽くされた街、荒廃した国でした。それ見て愕然とする。おそらくウクライナの人々もそうなるでしょう。避難した人々が帰ってきて、どう国を建て直すのか。どこから手をつけていいかわからない。そしてたとえ国が復興したとしても、なお憎しみは残るのです。それが新たな悲惨を生むでしょう。悲しいかな人類の歴史はその繰り返しであります。

どうして人類はこのような悲惨な戦争を繰り返すのでしょうか。それは人間の歴史がアダムから始まった罪の歴史だからです。神さまの創造の御業への冒瀆は今に始まったことではありません。アダムとエバが神さまとの約束を破ったその瞬間から罪の歴史は始まっていたのです。

「御顔を隠されれば彼らは恐れ、息吹を取り上げられれば彼らは息絶え、元の塵に戻る」(29節)「元の塵に戻る」と聞いて思い出します。木の実を食べたアダムに神さまは言われました。「塵にすぎないお前は塵に戻る」(創世記3:19)と。そしてカインによって弟アベルは殺されました。命の尊厳が奪われていく。創造の御業が冒瀆される。人類の罪の歴史が始まった。この罪が解決しない限り、世界はこの悲惨を繰り返していただけなのです。「どうか、罪ある者がこの地からすべてうせ、主に逆らう者がもはや跡を絶つように」(35節)ここに詩人の切なる祈りがあります。罪が消え失せ、神さまに逆らう者があとを絶つ。果たしてこのような世界は来るのでしょうか。

神さまはこの詩人の祈りを聞かれます。神さまは罪を解決されるためにもう一度わたしたちを新しく創造されるのです。それがイエス・キリストの救いです。今日の詩編の御言葉はそれを伝えております。「あなたは御自分の息を送って彼らを創造し、地の面を新たにされる」(30節)この御言葉はイエス・キリストによって成就しました。今日はヨハネ福音書の御言葉を読みました。よみがえりの主が弟子たちに現れた時の話です。罪に捕らわれ、失意と恐れの中にあつた弟子たちに主イエスは息を吹きかけて「聖霊を受けなさい」と言われます。天地創造の時に神さまが塵の塊に命の息を吹き入れ、人間を創造されたように、十字架で罪を打ち砕き、よみがえられたキリストが再び息を吹きかけ、わたしたちをもう一度新しく造り変えてくださる。そして神さまが「極めてよかった」(創世記1:31)と言われたその状態に導いてくださるのです。わたしたちが洗礼を受けてキリスト者となるというのは、その新しい創造の御業にあずかることに他なりません。パウロも「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた」(Ⅱコリント5:17)と述べています。すべてのキリスト者はそのことを自覚する必要があります。

『ハイデルベルク信仰問答』はこの新しい創造のことを「まことの悔い改め」と呼び、「新しい人の復活」と呼んで、そのように新しくされた者について次のように言います。「キリストによって心から神を喜び、また神の御旨に従ったあらゆる善い行いに心を打ち込んで生きる」(問90)と。それは神さまの造られたすべての被造物、すべての命を重んじ、この尊厳が損なわれないように仕えることを可能にするでしょう。憎しみ、争いが繰り返される世界、自然が壊される世界において、この救いは希望です。教会はこの救いを伝える責任があります。